

体発生が反復する系統発生
のうちに、変更と圧縮の印
とともに露呈する。

ほかならぬ美術史家のア
ビ・ヴァールブルク（1866
—1929）がルネサンスに見
た、古代の「死後の生」
Nachlebenとしての情念形
象Pathosformel。それは、
創造主からの原初の啓示を
喪失した流浪の民、ユダヤ
教徒の信仰の原点をなす。
ヴァルター・ベンヤミンは、
これを裏読みして、歴史哲
学を構想した。すなわち、
継承すべき過去は、断絶の
傷口を晒す不連続線の裡に
感知するほかない。と。そ
れはまたジャック・デリダ
がヘーゲルの残の幾多の残
群の最中に残る空間に幻視
した「不在」、「どこにも
ない」ユートピアの姿でも
あった。

レーニンにおいて革命と
は、「未来の先取り」すな
わち外傷発現の機構を未来
に消滅せ、「未知への跋渉」
という時間軸のまじき越境
に託して、「必要条件」を
事前に「十分条件」へと巧
みに「転化」する魔術であり、
そこにはマウリツ・エッ
シャーの《拙く手》（1948；
文庫版141頁挿絵）の精緻、
すなわち、ふたつの手が互
いに相互に拙くことで成立
する円環の循環論法が、
chronopolitics——時間軸上
の政治学として、戦略的に
仕込まれていた。

中国の「文化大革命」を
経ては、もはやrévolution
culturelleは唱え得ず、révo
lution symboliqueを提唱し
たのがピエール・ブルデ
ューだったが、彼が説いた
「象徴革命」即ち「藝術の
自律」は、皮肉にも資本主
義の無限軌道—経済一神教
の前に敗退を余儀なくされ
た。だが「資本主義の外部」
という「非・場所」の確保
は、本書初版刊行以来15年
を経て、「永続革命」の理
路にとって、さらに一層喫
緊の課題となった。未来を
現在に重ね合わせるに侵入
させるレーニンの「狂気」は、
なお「未完」である。もと
よりそれは完了を許さない
し、永続する過程 passage
continuなのだから。

「資本主義一神教」の無限軌道を、
「外部」から解体する「永続革命」はいかに可能か？

白井聡著『未完のレーニン——力』の思想を読む（講談社学術文庫）再読

稲賀繁美
京都府立大学文学部
現代学系客員教授

れるべき開放を実現できる
か否かの能力においては、
およそ不平等このうえな
い。ここに必然的に、秩序
回復論者や無政府主義者
との路線分岐が生ずる。

同様の論理は、ナチズム
との親和性も云々されたエ
ルンスト・ユンガーが明晰
に語ったところであり、ま
た他ならぬマルティン・ハ
イデガーが『存在と時間』
において「決断」に込めた
訓戒でもあったはずだ（ピ
エール・ブルデュー『話す
ということ』拙訳、藤原書
店、224頁）。そしてこの決
断の瞬時においてのみ、プ
ロレタリアートの連帯は
「当為」ではなく「現実」
となり、「革命」は祝祭の
相のもとに開花する。

だが「現実界」はそれと
して把握しがたい。「現
実」は、あらまほしき夢想
たる「想像界」にも、言語
秩序の支配する「象徴界」
にも回収不能だからだ。さ
らにこの「革命」状況で
発生する事態は、ゼーレン
・キルケゴールの言う意味
での「未知への跋渉」とも
難を授ける。周知のとおり、
逼迫する政治情勢の下、
『国家と革命』は未完のまま、
1917年9月段階で途中放棄
される。白井は、ここに現
実界の象徴界への浸潤を捉
え、一種必然の予定調和を
確認する。だが、評者とし
てはこの結末に、想像界の
過剰な楽天的侵入、現実に
対する「あらかじめの割捨」
を見ぬわけにはゆかぬ。

ここには時間軸における
詭計が蓄む、「未来の先取
り」（文庫版：215頁）と白
井が呼ぶ詭計だが、その機
構はレーニン（1870—1924）
と同時代を経験した精神分
析の祖、ジークムント・フ
ロイト（1854—1939）との
相互照射から抽出できよう。
未来の先行奪取は、トラウ
マの発現と同様に、時間
軸を逸及する。外傷は、
あくまで事後の言語化を過
去に投射することによって、
それとして認知される。
原初において抹殺された傷
は、事後の修復によって、
はじめてその痕跡を顕にす
る。太古の記憶痕跡は、個

白井聡氏の『未完のレー
ニン』（2007）が講談社学
術文庫に収められた。それ
を機会に、いくつか備忘録
を記して置きたい。本書の
明晰とは裏腹の、過度に圧
縮した難文、ほぼ意味不明
の悪文となることを、事前
にお断りする。

ロシア革命とは、政治権
力の移行、「被抑圧者が抑
圧者から権力を奪取すること」、
ではない。もしそれが
単なる権力の暴力的な奪
奪にすぎないならば、そ
れはレーニンの『国家と革命』
の誤読である。これが白井
の基本的な提案だろう。

ウィリアム・ブレイクは
The iron hand crush'd the
Tyrant's head / And became a
Tyrant in his stead という詩
句が知られる（The Grey
Monk, stanza 9）。巧妙な脚
韻が意味の皮肉をいやや増し
に増幅させているが、「暴
君を鉄腕が砕いて、自らが
暴君に成り代わる」とい
うわけで、うっかりすると
プロレタリアート革命も、
同じ轍を踏むこととなりか
ねまい。『平家物語』冒頭
を撰（もじ）るなら「勝者
必敗の理を現わす」とい
つてもよい。

レーニンがこれらの詩句
に通じていたか否か、評
らかにしないが、この稀代の
理論—実践家が、革命に必
然のこうしたアポリアに妄
かたははずはない。この極
格を逃れるには、「万国の
プロレタリアートは団結せ
よ」を、当為ではなく必然
としなければならない。だ
がこの条件はいかにして満
たすことができるのか。

ここで無産階級とは何
か、を問う必要が生まれる。
被抑圧者である限り、プ
ロレタリアートたりうる可
能性は、普遍的に開かれて
いる。だが「階級意識」に
目覚めない限り、政治的行
為者としてのプロレタリア
ートたりうることはでき
ない。この意識の覚醒に至
らない主体 subject = 隷属者
は、あるべき無産階級から
は、自動的に脱落する。

開放への可能性において
平等であるはずの人間たち
は、実際にその本来達成さ